

No	提 案 名	提案団体名	
		代表者氏名	所 属
12	“まち”を考える	“まち”を研究する会 坂田 卓	放送大学 教養学部
		指導教官 氏 名	中島 洋行

## 提案の要旨

まちの実態を正しく把握することから始めなければならないが、その前にテーマの意味するところは何かを整理しておく必要がある。「まち」とは「考える」とはどういうことなのか、題名についてせめて手に及ぶ範囲において明らかにすることから始めた。

次に、現在に至るまでに先人が実践したことを認識することによって、栃木という風土そして宇都宮という場と向かい合い、そこから考える手掛かりをつかもうとした。そうすることによって課題を明らかにしたい。それには、現在の暮らしぶりの基盤が形成されはじめ概ね出来上がった近世中期の下野が適当であると考えた。その後の江戸幕府から明治維新の大業は近世中期のおまけのようなものである。貨幣経済・市場主義がそれまでの極めて堅固な社会構造を丸ごと転換させてしまった。そのことは、精神生活に大きな影響を及ぼし現代に繋がっている。しかし、江戸の人々は激変の中にあって、古代から決して変わらない原則を保ったまま新しい時代に見事に対応した。私達の目指す“まち”もミニ東京都であってはならないし、ましてや国内外のどこかの町の模倣であってはならない。

次に宇都宮を知るために、議員・自治会役員・市職員・医者・NPO職員・一般の方々に面談を繰り返し地域の相貌をおぼろげながら掴んだ。地域によって違いはあるものの、その土地のさまざまな遺産を拠り所に懸命に暮らしを護るために努力されていらっしゃる活動には驚いた。それはその地区が失われていきそうだという危機意識に他ならない。それらを踏まえ、所感のようなものになるが考えていくための若干の具体策を提示する。私達の目指す「あるべきまちの姿」は江戸期の俳人斯波園女の一句「衣更 みづから織らぬ つみふかし」に極まる。その地点にどこまで近づけるかが肝心なことである。

### 1. 課題（テーマ）について

#### 1-1. すすめ方

今年の課題は「人口減少時代の豊かな宇都宮をつくろう！」である。この課題の引き出された背景は、市政研究センターの「課題の説明」によれば、「社会の変化をうまくとらえ将来に向けて豊かな宇都宮を実現いく」ために「変化を具体的に把握・予測」し「経験のみにとらわれないで」発想し取り組むことが求められているとしている。市はまちづくりの最上位計画として6年前の平成20年3月に「第5次宇都宮市総合計画」を策定した。最上位計画の骨格は3つの戦略プランとそれらのプランを実現するための具体的なまちの姿として「ネットワーク型コンパクトシティ」を形成するとなっている。3つの戦略プランとは、「みんなが幸せに暮らせるまち」「みんなに選ばれるまち」及び「持続的に発展できるまち」である。

テーマになっている「豊かな」とは何か、「みんな」とは何を対象にしているのか「幸せ」とは何か、「選ばれる」「持続的」「持続的に発展」とはどんな内容なのかを明らかにしなければならない。そのことこそが重要でありそのことが唯一の目的である。将来はまだ来ておらず目を見張っても見えない、現在は目の前にあって日々忙しく応対しながら暮らしている。過去はすでに逝ってしまったが確かにあって目を凝らせばその姿は見えるのではないか。私たちは、「どこへ行くか」を気にしがちであるが、それは「どこから来たか」を振り返ることから考える他ないのでないか。

宇都宮市昭和59年発行『うつのみやの歴史』には近世中期から後期にかけて大きな人口減

少があったことを記録している。およそ 100 年間に 4 割の人口が減少した。しかもそれは関八州のうち栃木県（下野国）と茨城県（常陸国）のみであった。「第 5 次宇都宮市総合計画」の中で、宇都宮市の人口は平成 27 年をピークに 35 年後平成 62 年には 15% の人口減と推計している。予測の当否はともかく、近世と似通った状態であることには変わらない。そこで下野国の人口減による地域の荒廃に対処した歴史に学ぶこととした。

### 1-2. 「まち」について

このレポートのテーマを「“まち”を考える」とした。歴史の学びに先立って先ずその言葉について明確しておかねばならない。「第 5 次宇都宮市総合計画」中の戦略プランにある「まち」とは何か。『国語大辞典』によれば、およそ 18 の語義が載っている。そのうち最後に追加されたであろう「⑯地方公共団体の一つ。その要件は都道府県の条例で定められ、一般に人口が市よりも少なく村よりも多い」が概ね現在我々が使っている「まち」の語感に近い。

「まち」も「むら」も和語である。元々の和語としての意味合は下の二書に負うところが妥当ではないかと思われる。

出典	『古典基礎語辞典』大野 晋編 角川学芸出版 2011 年	『日本語源大辞典』前田富祺監修 小学館 2005 年
まち	盛土、壁、垣などによって囲まれた都市空間	田の区画、区画した田地。人口が密集し家屋の立ち並ぶ地域
むら	ムラ（群）と同根。人が多く集って住む所をいう。 都会から離れた地域に位置するが多く、上代から行政・納税の単位となっていた	「むら（群）」と同語源か 田舎の人家がまとまってある地域。また、そこに住む人々によって形成される地域的な共同社会

現在の「まち」も「むら」も盛土や垣などによって囲まれてはおらず、どこからも出入り自由の場所である。今よりも遙かに生きることが困難で、それだけに余程真剣であった頃は家族同士、仲間同士が身を寄せ合い一定の約束を守りながら生きていくことが生存の最低条件であった。壁や垣（それが物理的に有効か否かは別として）は、空間を区切る場合の必要条件であった。今も神社や地鎮祭に見られる注連縄は人と神との境界が曖昧であった上代の名残であり、私たちの深奥に生き続けている証とみるべきではないだろうか。

### 1-3. 「考える」について

稀代の批評家小林秀雄は「考へるといふ事」という題の文で述べている。

「宣長が、この考へるといふ言葉を、どう弁じたかを言って置く。彼の説によれば、「かんがふ」は、「かむかふ」の音便で、もともと、むかへるという言葉なのである。「かれとこれとを、比較（アヒムカ）へて思ひめぐらす意」と解する。・・・「むかふ」の「む」は身であり、「かふ」は交ふである。考へるとは、単に知的な働きではなく、物と親身に交わる事だ。物を外から知るのではなく、物を身に感じて生きる、そういう経験をいう。」

宣長とは江戸中期に国学を大成した伊勢の小児科医、本居宣長のことである。「まち」を物として客観的に観察し分析し、あれこれ調べた挙句に頭で考えを巡らせて様々なアイデアを出すことは「考える」ことではないのだといっている。「まち」と私が向き合って語り合い、時には対決し抱き合いながら交わることが「考える」ことなのである。果たして私達はどこまで真摯に「考える」ことができるだろうか。

### 1-4. 宇都宮は「まち」か？

宇都宮市は明治 29 年市制施行以来 16 度の分離・編入を経て現在に至っている。市制施行時の地域以外は全て「村」であり「まち」ではない。「村」が編入された後に、統合した場所は「まち」という結界が新たに設けられたのであるが、行政上の領域が新しく生まれたにしても暮らしぶりが変わるわけではもちろん無い。後に述べるが、今回訪ねた、い

いくつかの地区はその風土を合併前とほとんど変わっていないように感ぜられた。右図において①以外の全ての地域はもと村である。

その意味で宇都宮市は村落の集合体と言うべきかも知れない。①の領域とそれぞれ別々の色分けされた領域、さらにその中で、独自の風土と文化に根ざした生活が営まれている

各々の地域の多様性を壊すことなく、しかも「まち」として統合するには極めて困難な道のりを覚悟しなければならない。

宇都宮市の所管別用途別土地利用構成は図2にみられるように陽南、宝木、本庁の3地区と他の13地区は全く様相を異にしている。3地区は自然が乏しく、人の密集地帯であり“まち”といえる地域であるに対し、他の13地区はおよそ8割が田畠を中心とする農山村である。宇都宮市

は“まち”ではなく村々の集合した一大部落である。

それの村落がそれぞれ多様性のある村として今後どう存続していくかが直面する最大最も深刻な問題である。従って、「村々の多様性確保」および「存続」のための課題設定は単一の理念で包括し得るものではなく地域特性を踏まえた個別かつ具体的な課題を解決し、なおかつ宇都宮市として一体感のあるものでなくてはならない。単に地域ごとの「まちづくりビジョン」を取り纏めて市の基本計画の出来上がりという訳には到底いくまい。

## 2. 下野国近世の荒廃について

私たちが直面している課題は近世中期の栃木県が経験した状況と酷似していることは冒頭に述べた。これを乗り越えるに困難な道のりではあったが、先人の奮闘は私たちに大切な示唆を残してくれている。先祖の遺産を汲み尽くすにはあまりに深い水深であるが、その一端を知ることによって“むら”や“まち”を考え

る端緒が開けるのではないか。幕府のマクロ

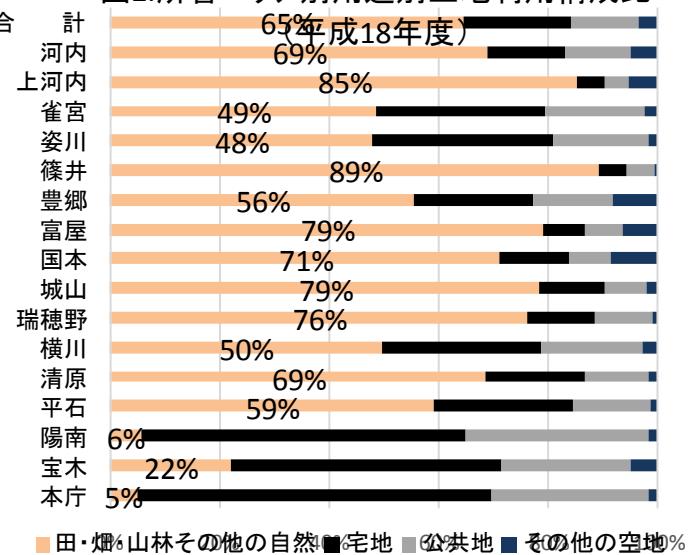
政策、中央から派遣された代官の具体的行政  
施策、末端農民の努力の順に跡をたどる。

### 2-1. 100年間に人口4割減

江戸中期は社会構造が加速度的に変化した時代である。下野国は大幅な人口減少とそれに伴う税収不足から次第に地域全体が荒廃し、それがさらなる人口減少を呼び込むことになる。図3は享保期から天保期（弘化以降は参考）までの下野の人口を指数表示したものと米価を重ねたものである。およそ100年間に全国平均の人口変動は安定しているに対し、下野、常陸2国のみ4割人口が減って

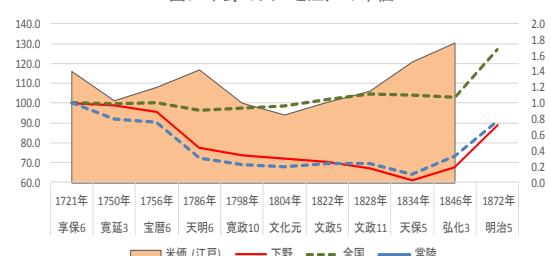


図2.所管エリア別用途別土地利用構成比



■田・畠 ■山林その他の自然 ■宅地 ■公共地 ■その他の空地

図3 下野の人口と江戸の米価



いる。農村荒廃の真の原因はボーダーレス化（現在のグローバリゼーション）と新自由主義ともいえる貨幣経済の齎す欲望の開放にあった。後述『農家捷徑抄』の解題を著した須永昭氏はいう。「過重な年貢負担や凶作は、農民生活を困窮させる一要因ではあるが、それは近世中期に限らず、前期にも後期にもあることであり、・・・十八世紀中葉に特徴的な固有の現象を説明する要件としては不適格であると思われる。真の原因是、元禄期を境に進展はじめた商品貨幣経済が、ようやく農村内部にまで深く浸透してきたことに求められねばならない」。

建前は自給自足であるが生活手段は貨幣で購う他ない。農具、塩、干鰯などの金肥を手に入れなければ生産性はあがらない。とりわけ金肥は元禄、享保期にほぼ下野国全域で使われていた。享保期の「万覚帳」によれば、水田の苗代締めに干鰯、油粕が用いられており、金肥使用を梃子に商品貨幣経済の浸透を招いていた。それによって引きおこされた農民経営の変動が、前述の農村荒廃現象の底流にある問題と考えねばならないであろうとしている。

## 2-2-1. 荻生徂徠のマクロ政策

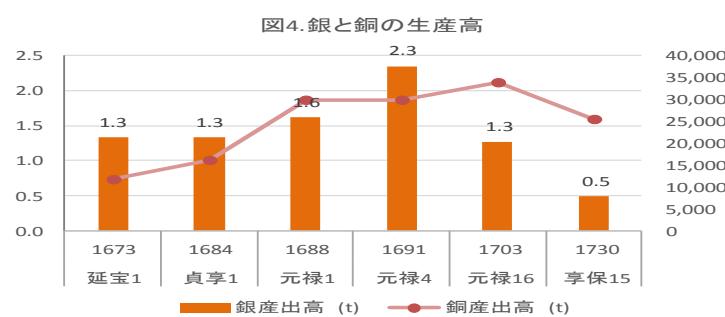
吉宗の主導した享保の改革は大成功とされているが、実際には時代の風に流された面もあった。伝統を重んじ「聖なるもの」を信じる荻生徂徠は、急速に進んでいる貨幣経済の浸透によって落ち着いた暮らし失われていく世相が国全体を疲弊させているという危機感を持っていた。『政談』は吉宗に提出した畢生の政策論、なかでも制度改革論である。社会を考える上で通底している徂徠の人間観、社会観は次のようなものである。

- ① 言語では表現しきれない経験世界を重視する
- ② 人間は習慣体験を通して一定の行動様式を体得する。従って制度（システム、仕組み）を通じて人間のあるべき行動様式を形成し、これによって世を治めるという実践的な統治をすべきである。
- ③ 不確実で動態的な社会の中で政治を行うには宗教（聖なるもの）が必要。
- ④ 「人」について、原子論的な砂粒では無く、お互いに協力し交流し依存し合い集団や組織を形成する社会的動物である。  
父母・兄弟・君臣・朋友の親密な関係を土台とすること。その上で統治の技術を使用することが王道である。その土台なくして統治技術のみを弄するのは邪道である。  
(答問書中-195~197)
- ⑤ 各人は社会的分業を通じて君子が仁政を実現するのをそれぞれの立場から支える「役人」である。  
(答問書中-195~197)
- 士農工商の制度を通じて、統治者と被統治者は相互依存関係を結び、階級を超えた一つの運命共同体を形成しているとした。
- ⑥ 時代環境の制約の中で、己の為すべきことを為すしかない。そう覚悟することが「天命を知る」ということである。  
(弁名上-59)

具体的な政策は、商品経済化の進展に伴う「物価の不安定化」、「武士と農民の経済基盤弱体化」にどう対処すべきか

という点にあった。具体的な政策例は①武士の領地への土着化②兵農分離の弊害を是正（武士は現場に戻って現実を直視せよ）③治安の改善④結果としての税収増加⑤デフレ対策を断行した。その中でデフレ対策の内容はどうであったか。

【貨幣経済の進展⇒金銀不足⇒貨幣不足（物価特に米価の下落）⇒武士・農民の困窮】という負の連鎖に対してポリシーミックスを提言する。すなわち、**金融緩和+需要管理+過剰なグローバリズム阻止**である。金銀相対済令の廃止、生



活の嗜侈化是正、風紀是正、困窮民の救済、格差是正（「困窮孤独の者には御扶持を下さるべき事也」政談卷之4）などを実施した。中でも金銀の減産に対し、流通貨幣を産出の安定している銅銭に変えて増発した。

## 2-2-2. 代官のプラグマティズム

田沼時代の物価高騰、天明の飢饉による世情の動搖の安定を図るために松平定信が起用され、いわゆる寛政の改革が行われた。目的は財政再建と農村荒廃の立て直しである。関八州の中でも人口減、荒廃の激しい下野へ飛び切り優秀な代官三名を赴任させた。しかし従来のやり江戸に滞在したまま遠隔操作で行政を行うといった従来型の代官とは異なり、在地に陣屋を置いて詰めた。各陣屋に詰めた3人は互いに農村復興の成果を競った。

その3人とは吹上村陣屋（現栃木市）と八木沢出張陣屋（大田原市）に詰めた山口鉄五郎、真岡陣屋の竹垣右衛門、東郷陣屋（現真岡市大前神社付近）の岸本武太夫である。通説によれば、

寛政の改革は締め付けがきつく、失敗したとされている。しかし、現場では定信の英断のもと3人の苦闘は下野の荒廃に歯止めをかけ、人々の暮らしを安定させることに多大の功績を残した。下表にその実践の一例をあげる。

項目	施策内容	備考
生活態度諭し	<ul style="list-style-type: none"> <li>・贅沢の禁止（都市の生活を真似ないこと）</li> <li>・買わずに済むものは買わず、無駄金を使うな</li> <li>・原則地産地消、地産他買奨励</li> </ul>	
人口増加策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入百姓奨励（特に北陸より） 移住者は3年間無税。家作普請手当て支給</li> <li>・離村、死に潰れ農家の相続人に対してへ手当て支給</li> <li>・他所へ奉公人になった人を引き戻した者へ手当支給</li> </ul>	成果 参照
減税	・年貢2割減（文化2年以降5年間）	
育児手当	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の居る家について、寛政4年以降8年間毎年1俵支給</li> <li>・子供の居る家について、5年間にわたって5両2分支給</li> </ul>	
荒廃地の再生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・荒地の起こし返しに北陸から入り百姓を迎える 移住手当て一人当たり3両支給⇒希望者殺到</li> <li>・自力で用水を普請した者へ手当て支給</li> <li>・起こし返しの困難な田畠に桑・茶・楮の植林奨励</li> </ul>	
流通コスト削減	<ul style="list-style-type: none"> <li>・肥料輸送の中間マージン廃止 江戸市場→仲買→運送業者→農家のうち□部分を廃止</li> </ul>	
行政コスト削減	・役人の廻村は日帰り、手弁当持参	

### 成果

#### 亀山村（真岡市）の例

- ・寛政11年（赴任後8年経過）に41戸の入り百姓入植
- ・寛政13年に12名の奉公人を引き戻す。戻った者に対し、農具と種子を貸与し、翌年には2町5反歩の荒地を起こし返した
- ・人口は寛政11年（1799）20人から文化7年（1810）180人まで11年間で9倍増加。

#### 「格別之御仕法を以村柄立直候」（亀山村文書）

担当地区	再生荒廃地	戸数	人口
真岡陣屋 竹垣右衛門	5000石再生	+300戸	+1700人
東郷陣屋・東郷陣屋 岸本武太夫	6669石再生 新田・水路整備	+197戸	+1533人 農耕馬60疋増加

以上、3役人の仕法（行政の施策）から学ぶことは次の3点に集約される。

- ①トップが必要な人材を選び、彼らに農村復興を賭けた。そのため、従来の江戸詰めでは

なく、実効が上がるまで現場へ張り付かせた。

- ②選ばれた役人は現地で地域住民と苦節を共にして暮らした。暮らしの中で互いの共感できるようになり村落一体で取り組んだ
- ③現場の実態を正確に把握して、失敗を恐れず考えられる手を打った

## 2-2-3. 村民の活躍 — 小貫萬右衛門の日々 —

人情深く極めて有能でかつ実践的な役人に応えた農民の活躍が村の荒廃を立て直し元の落ち着いた暮らしを取り戻すためにどれ程大きな力になったかも見ておかなければならない。当時の下野には飢饉や離農者の続出する村の中で踏みとどまり、嘗々として生業の改良に勤め成果を上げていた優れた二人の農民がいた。芳賀郡小貫村(現茂木町)の小貫萬右衛門(1762年-1837年)と河内郡下蒲生村(現上三川町)の田村仁左衛門(1790年-1877年)である。

住みついている土地の風土、地形、土壤の性質、水利、防災を含む生活設計等詳細にわたって綿密な調査の跡が見え「暮らす」ことについてのプロフェッショナルであることが了解される。すでに現代においてはすっかり忘れてしまった生きる智恵ではないだろうか。ここでは小貫萬右衛門の著した『農家捷径抄』から数句を引いて考える。

当時の身分制度は士農工商の四民によって成立していた。著作において冒頭、萬右衛門は農家経営を生業とする農民であり「先務の大概」(農民としての任務)を明らかにし天職としての自覚を持たねばならないと説く。

「夫れ民は邦の本なりと雖も、君は君事を以て率々として上に在り、民は民事を以て率々として下を務む。・・・手足耳目鼻舌は互に相け用を為す也。是れ君民一体にして、上は民を愛し、民は途上を敬う也。國豊かにして貨財を生ず。惟れ昔の難を忘れ、今の易を楽しむ。・・・未だ精しからざる有れば、田園荒を恢ぐ、豈に黎たるべくん哉。予農夫の稼穡薦蓑の術を解る者の為に、小冊を綴り共の先務の大概を彰かにする。名づけて農家捷径抄と日う」 時に文化五戌辰十一月 (自序)

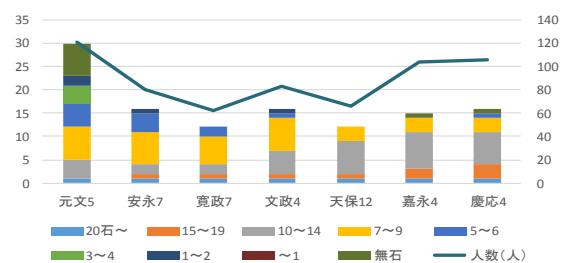
「其道を知るに先務あり、先務を知らざるを迂遠といふて迂遠き道なりとす。」 (付録)

萬右衛門のいう先務とは世の中を成立せしめている五倫(父子の親・君臣の義・夫婦の別・長幼の序・朋友の信)を会得した上で農民という天職としての技術を磨きあげることに尽きる。この書はそのための捷径(近道)を村の衆に知らしめようとした書物である。生活苦だからといって、子殺しが当たり前になっているこの地(下野国)の風儀を改め、人口を増やし生産力を上げなければ落ち着いた暮らしはできないと訴える。その上で夫婦二人の経営収支計算と方法、肥料の種類と施肥の方法を詳細に説明する。とりわけ肥料の種類とその使い方については詳細を極めている。当時すでに金肥による効率的な農業が下野にも普及しており、貨幣による金肥購入が農村の困窮の主要因であったためである。貴重な肥料を施肥し実証実験した結果を農事帳へ記録することは生業持続の基本であったに違いない。一方、石高を見積もり年貢高を定める権限の役人に対しては検分の際に諸掛を含めた正確な見積もりをするよう奉制することも忘れていない。

次に、農民の身持ちについて当たり前の心構えを説いている。萬衛門は貨幣経済の浸透に伴う徂徠のいうところの面々構が世の中に流行としている世相を反映していることに危機感をもっていたに違いない。ギャンブルの戒めについても記述がある。現代風にいうところの「豊かな社会」とか「幸せな暮らし」といった生活にあこがれる風儀が廃れつつあり、堅実な農家経営を侵食しつつあった様子が活写されている。

そもそも、これ程に村が荒廃した原因について、いささか下野人にとっては酷ときこえるような苦言を呈している。しかし、一村落の

図5.小貫村の人口・戸数推移



人口減少に留まらず今や国の危殆に瀕する現実を前に苦悶していたことが想像される。この状態から逃げることなく役人と力を合わせて村落再生に励んだ結果、明るい見通しが出てきた様子がうかがえる。そしてこの辛苦を忘れないようしてもらいたいと望む。

「近比御上様當国芳賀郡中へ格別の御仁愍を以、出生小児養育御手當下し置れ、追々村柄立直り可申事必定也。・・・親ハ苦をする子ハ樂をして、其子ハ乞食するといふ俗語あり。」（同前）

萬右衛門の置かれた苦境をおもえば、小貴家の再興が最優先であつただらうことは想像に難くないが、これに留まることなく地域の荒廃が結局個々の家々に破壊をもたらすしていることを深く理解していたのではないだろうか。萬衛門の言わんとするところを要約すれば下のようになる。

- ・四民は各々世の中の仕組みは五輪で成り立っていることを理解していなければならぬ。四民それぞれが己の役割を自覚すること。
- ・都市の魔力に惑わされず、地に足をつけて天職のプロとしての技術を磨くこと
- ・そのための創意、実験、記録、調査のP D C Aを繰り返すこと。
- ・一人一人の努力は勿論、目的を達成するには四民の団結力が欠かせない

### 3. 宇都宮市の現状調査

様々な方々と面談することによって宇都宮市の様子を知ろうと試みた。①地域の人口や世帯数とそれは多いのか少ないのか②地域の特徴は何か③村だったが後に宇都宮市へ合併した地域については、合併が円滑であったかもめたか④現在の地域の問題点または課題について

#### 3-1. 面談の記録

各地域とのかかわり方は主に生業別、とりわけその立場によって大きく異なってくる。ここでは生業（立場を含む）と役割意識のマトリックスで面談内容を要約した。紙数の関係で詳細は展示の「面談記録」にゆずる。

面談対象者	自己と自己を中心とするグループ	他者と他のグループ
市会議員	<ul style="list-style-type: none"><li>・人口は減るが、宇都宮は他と比べて樂觀的。しかし税収減に伴いコンパクトかは避けられない。LRTかBRTかは議論が分かれる。</li><li>・政策面で選出された地元が優先したい</li><li>・全体を考えると矛盾もある</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・都市設計について、周辺部は不便にも耐えてもらわないと仕方ない。</li><li>・本庁と自治会の関係は上手くいっているが本庁と出先は地区によるパラツキ大</li><li>・地区によって予算配分の不公平は避けられない（現行選挙制度）</li></ul>
市職員（出先）	<ul style="list-style-type: none"><li>・地区が本庁の意向に沿わざるを得ない</li><li>・自治会への加入対策が重要。熱意必要。</li><li>・伝統の祭りを核に住民（特に児童）の定着を図る。結束する場は神社である。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・合併は+と-功罪相半ば</li><li>・本庁は地区の実態を知ろうとしない</li><li>・生活の基本（生業、買物、金融、スタンド、交通）が成り立たないが地区では手が打てない</li></ul>
市職員（本庁）	<ul style="list-style-type: none"><li>・地区から出てくるビジョンをしっかりとまとめる</li><li>・住民登録の時に自治会加入を薦める</li><li>・寺社仏閣は把握していない</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・まちづくりの主体は各地区であり、本庁は後押しする</li><li>・家族観の醸成は大事だが、今後検討したい</li></ul>
自治会責任者	<ul style="list-style-type: none"><li>・地区の資産を洗出し最大限活かしたい</li><li>・神社の祭りを中心に結束を図る</li><li>・地区的ビジョン作成を急ぐ</li><li>・地区ごとの格差が大きいが仕方ない</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・祭りについての対外広報を市役所で拡充してもらいたい</li><li>・市有施設が宝の持ち腐れ。活用を。</li></ul>
地区住民	<ul style="list-style-type: none"><li>・せっかくの地区的資産が点に終わっている。線で結びたい。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・災害発生にもっと関心をもって欲しい</li><li>・オンデマンド交通の実態、見直し必要</li></ul>
僻地診療所長	<ul style="list-style-type: none"><li>・立地は関係なく良い医者を連れてくる</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・行政が本気になって地域を考えるかど</li></ul>

	ことが大切（30人/日がペイライン）	うかにかかっている ・日本の農は素晴らしい。地域再生は農の再生無くしてありえない。
--	--------------------	--

### 3-2. 中間集団の現状

3-1. で見た通り、全ての地域は神社祭祀の一環である祭礼を中心とする伝統を引き継いでおり、一年の暮らしのリズムも神社祭祀を中心に回っている地区が多い。明治維新の廃仏毀釈による寺院衰退は確かにみられるが今なお神社と寺院が共存している遺産も多い。敗戦後のGHQによる神道弾圧にも拘わらず地域の精神活動が暮らしの精神的支柱になっていることに思いを致さねばならない。”まち” “むら”は長い期間神々と共に暮らして来た。祭礼抜きでは地域の暮らしは成立しない。実態調査のために宇都宮市16地区のうち本庁所管地区を含む13地区へ電話で解答を求めたが、河内自治センターおよび横川地区市民センターを除いた11地区からは回答を得ることはできなかった。それらの把握は市役所の管轄外であり、神社・県に問い合わせするようにとの市担当の指示に基づき県の所轄部署から県内の状況を得ることができた。上の表は近辺3市の神社

の数であるが、いずれの市も1000世帯に1社の神社がある。神社数は神社庁に法人登録されているもののみであり、未登録の神社がかなりあるのが実態であり実際には中間集団の寄りあう場が多く存在する。先人のたゆまぬ配慮によって地域の力を集める場が相当数継続維持されていることに感謝すると同時に私たちがこれを繋いで行く責任を自覚しなければならない。栃木県の宗派別登録宗教法人は神道系が仏教系の倍を越えていて圧倒的に多い。宇都宮市においても、地域一体の行事は神社祭祀を核に行われている。

### 3-3. パチンコ・スロット店舗の現状

ギャンブル依存症に関して今年9月に厚生労働省から発表された報告によれば、男8.8%女1.8%となっていて男女とも我が国は先進10カ中最悪の有病率である。法律上、賭博は禁止されているが、公営を含め射幸心をあおる宣伝は野放し状態である。またインターネット依存率も増加傾向にある。宇都宮市内のパチンコ・スロット店舗は62店舗あり、人口比にすると8000人当たり1店である。店舗の多少ではなく集約管理があるべき姿である。

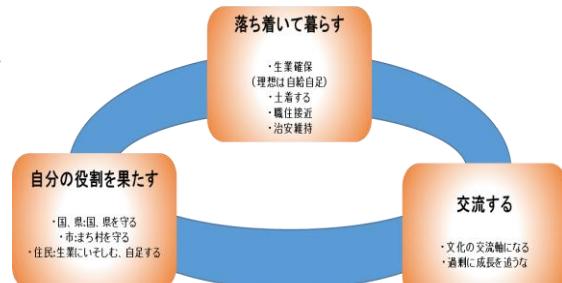
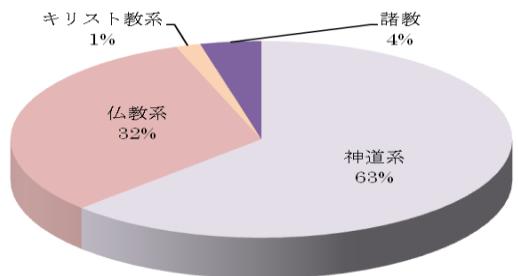
### 4. まちを考えるヒント

良い治世とは日々の生活を平安に送ることである。生まれ育った土地に土着して落ち着いて暮らすのが理想の暮らしである。さらに望むらしくは人同士の付き合いがあり、たまさかの稀人との出会いがあればこの上ないのでないだろうか。そのためには各々が与えられている天職を自覚してその道を極めることに自足する

栃木、群馬、茨城各県の神社数より聞き取り					
	神社数	人口(千人)	世帯数(千)	人口比	世帯比
宇都宮市	224	518	221	43%	101%
水戸市	116	271	117	43%	99%
前橋市	162	340	142	48%	114%

	神道系	仏教系	キリスト教系	諸教	計
宇都宮市	224	78	13	23	338
その他	1,724	909	37	99	2,769
合計	1,948	987	50	122	3,107



ことに尽きる。住民、自治会組織、市職員、議員それぞれが各々の地域とどれだけ親身に向き合い暮らしの場を「考える」かにかかっている。

#### 4-1. 速やかに手を打つべきこと

平成24年度に見直した「第5次宇都宮市総合計画」改定計画は計画完成年度を平成29年度の3年後としている。残った3年間で取り組むべきことは山積していると思われるが、今現在支障が発生している事案については迅速に手を打つべきである。

- ・深刻な水害が発生している地域の暫定対応と河川計画
- ・買物に支障が出ている地域のバス路線拡充(現行オンデマンド交通では対応不十分)
- ・給油スタンド、住民が集うことができる店舗の招致
- ・有人の金融機関を地区に最低一つは設置。振り込め詐欺などの治安面と高齢化に伴うATM操作故障(足銀と柄銀の繩張りが決まっていて出店できないなどの事情あり)

#### 4-2. 提案

石破地方創生担当大臣は「やる気のある地域は国が後押しをする。金も人も出す。」と述べている。また、宇都宮市の職員は「市の役割は地区がやろうとすることを後押しする」と言う。この伝であれば地区出先のセンター長は「自治会長のやろうとするのを後押しする」さらに自治会長は「住民のやろうとすることを後押しする」ということになるのではないか。

一体先頭に立って進む方向を決めるのは誰なのか。危機に際しては後ろを押すのではなく、先頭で牽引する船頭がいなければ船は山に登る。困難であっても地区のセンター長が先頭を切って牽引し自治会の力を借りて地区を護るべきではないか。「後押しします」は、前に出るのを臆するのか、さもなければ今現在は危機では無いが、いずれ対応すれば間に合うのではないかと考えているのではないか。英国の政治学者E・バークはいう「国は、死者と生者と生まれてくる者の三者の協同事業である」。逝った多くの先人と共に歩まなければならない。

##### (1) 市境を護る 特に過疎化している北部地区（上河内、富屋、篠井、国本、城山）

- ・地域自治センター、地区市民センターの各責任者は市長が有能な適任人材を選任し、当該地区再興計画を提出させ予算付けした上で計画年度終了まで職を解かない制度を導入する。現センター長が適任である場合はこの限りではない。選任された職員は任期中は当該地域内に居宅を設け。適切な人材が居ない場合は国に要請して確保する。その代わり地区の行政権限を大幅に委譲し市長以外の本庁への報告義務は無いものとする。
- ・旧街道(東山道、奥州街道)の復旧と保全。市主導のもとに、各地区自治会の協力を得てキャンペーンとして極力ボランティアを募り街道沿いに「標識」「説明板」を設置する。活動を通じて歴史を学び人と交流、ひいては周辺地域からの交流を図る。
- ・市境の対応のため財政面・人材面で「第5次宇都宮市総合計画」に支障がある場合、計画の遅延もやむを得ないものとする。
- ・今後も起こるであろう合併の際に、優位にある地区は劣位にある地区の新たな相互調整を拒みあるいは面倒がってあくまでも「自分たちのやり方」に従うことを要求してはならない。逆に劣位にある地区は危険なやり方を提案された場合、面倒だからといって「相手のやり方」に順応した振りをしてもらわなければいけない。

##### (2) 人を育む

まちづくりは人づくりから始めるのが一番早い。日本創成会議が今年提言した「日本創成会議 人口減少問題検討分科会」の提言を受け、全国知事会議が7月15日、佐賀県唐津市で開かれた。参加した本県の福田富一知事は「人生観、家族観、結婚観が大きく変わり、子育て支援策も重要だが、最後は学校教育でしかない。結婚や子育ての素晴らしい人が価値観を認めなければ、施策を充実させても抜本的な解決にはつながらないのではないか」と指摘した。徂徠に再登場してもらう。物事を上手く運

ぶには人間の性質を押さえておかなければならぬと言ひ切る。いくら制度（法、仕組み、システム）を作つても実際にそれを解釈し運用する人が居なければ機能しない。人材こそ最重要なものである。徂徠は制度づくり以上に人材を肝要だとする。

「法よりハ人猶肝要にて御座候。たとひ法ハ惡敷共、人能候へば相應之利益ハ有之物ニ候」（答問書中-184）

3 人の代官も小貫萬右衛門も先ず人間の教化を優先させて取り組んできたことは上にみた通りである。

- ・まちづくりに教育施策を折り込む。
- ・宇都宮市出身の蒲生君平はとりわけ著名であり、すでに小中学校の授業に含まれていることと思うが、我が下野国の普通の農民が困難に取り組む事例として萬右衛門、仁左衛門の著書・事績を学校教材に採用すべきである。家庭をより堅固にするためには『農家捷径抄』が適当である。
- ・文化遺産（職人技術・寺社仏閣・祀りと祭り・古文書など）の棚卸 文化部と政策部の連携のもと、本庁主導のもと至急神社と寺院の所在と祭祀の実態調査。棚卸を通じて遺産価値を認識することができる。今後どう維持していくかに議論を割くより、先ずは資産台帳づくりが先決。
- ・射幸心を呼ぶギャンブル場（競輪、パチンコ、スロット）の集約化と入場制限。
- ・昭和 60 年以降の歴史を反映し『うつのみやの歴史』の刊行。

#### 参考文献・資料

- 『うつのみやの歴史』 宇都宮市刊 昭和 59 年  
『ふるさと栃木県の歩み』 栃木県教育委員会編 昭和 61 年  
『小林秀雄全集第十二巻』 小林秀雄著 新潮社 昭和 43 年  
『日本の思想』 清水正之著 放送大学教育振興会 2009 年  
『仏教と儒教』 竹村牧男 高橋元洋 編 放送大学教育振興会 2013 年  
『図説 栃木県の歴史』 河出書房新社、1993  
『日本農書全集 21』 農業自得 農山漁村文化協会 昭和 56 年  
『日本農書全集 22』 農家捷径抄 農山漁村文化協会 昭和 55 年  
『日本思想史新論』 中野剛志著 ちくま新書 2012 年  
『日本思想体系 本居宣長』 岩波書店 1978 年  
『日本思想体系 荻生徂徠』 岩波書店 1973 年  
「下野新聞」2014 年 7 月 15 日付朝刊 「宇都宮市域の変遷」宇都宮市ホームページ  
宇都宮市議会議員、宇都宮市職員、診療所長、自治会責任者、地区住人、放送大学関係者